まれる。

蓋し本問題に於ける根本史料は極めて零細なる斷簡零墨であり、之を渉獵し、驅使し、綜合して結論を見出すのは容易の事でない。著者は近世以前の貨幣史に基礎的の研究の必要を感じ、「廣汎なる史料の檢討と嚴密なる其批判」並びに「深廣なる再吟味の切要」を主張するものであり、その下に未開の境地に入つて博引傍搜、微に入り細を穿つて紛糾せる貨幣の流通に關し其眞相を把握せんとしたる眞摯なる研究心、不撓の奮鬪力とは本書を繙く者の等しく感ずる所であらう。而して其等の史料の統計的檢討を試みて一新機軸を出し、學問的體系を與へたる所、我が國貨幣史を大成する劃期的文獻の一たるを失はぬ。

三浦博士は序文を寄せられて「本書に依つて始めて此方面に光明を與へらるゝ事は少くない」と稱揚せられ、更に著者の處女出版を學界に送り出すに當り「學界により以上の寄與をなし、稱讃を博する日の到來を期待」し「此かゞやかしき期待を以てはなむけの辭」とせられて、その前途を祝福せられてゐる。

貨幣流通の表面的過程に流れず、社會經濟史的見地より觀察せる本書を學徒に薦めたい。(菊版四五八頁、コロタイプ圖版三葉、東京刀江書院、價三・二圓)〔寺尾〕

**●近代日本外國關係史**　田保橋　潔著

著者は十年來近代日本外國關係史を研究し、其の業績の一端を時々諸雜誌に發表されたが、今舊稿を全部改訂し其後の新研究をも加へて本書を世に出だされた。其の記述の範圍は十八世紀以降十九世紀中期に至る約一百年間で、露、英、米三新興勢力が次第に我國を壓迫し、幕府當局をして苦心焦慮、遂に其の祖法たる鎖國令を廢棄し、再び歐洲人に國土を開放するの已むなきに至らしめた事實を、內外の史料によつて詳細に記述してあつて、日本近代外交史の研究者には必讀の書である(菊版七二〇頁、東京刀江書院發行、價六・二〇圓)〔松野〕

**●日本民族學**　神事篇、風俗篇、歷史篇　中山　太郎著

著者は柳田氏折口氏等と共に日本民俗學の成立に全幅の努力を拂つた人であり日本巫女史を始め多くこの方

面に關する著書を有して居るが此度その論文を集めて神事・風俗・歴史、隨筆の四篇こしその三篇が今世に出たのである。その内容を一々紹介することは出來ないが叙述は極めて可易であり取材も廣汎で我々が民俗について注意しそうな問題は大抵これを取扱つてゐる。

この學問は我が國に於て短い歴史――その萌芽は既に久しくあつたこしても――しかもつてゐない。いはゞ新興の學問である。從つてそこには潑溂たる元氣こまた學こしての不整頓が豫想せられるのであり本書の内容もこの豫想を裏切るものではない。人はそこに多くの興味ある思ひ付きを發見するこ共にその論證の不充分について一種の物足りなさを感ずるであらう。卽ち問題の取扱ひがなほ羅列的であり概念の分析が嚴密でない。これは民俗學が學問こして未だ明確なる體系を有たないことを一の原因こしてゐる。我々は著者が斯學の爲に拂はれし多年の努力を感謝するこ共にその結果については斯の如く感ずるを禁じ得ないものである。これらの點に於て著者の自重こ斯學にたづさはる新進學徒の努力こを期待するものである。（四六版各篇四五〇頁内外、定價各三・二〇東京大岡山書店發行）〔肥後〕

### ◉後法興院記

本書は關白近衛政家の文正元年二十一歳の時より永正二年六十二歳卽ち其の薨年に及ぶ全部三十卷の日記で、世に寫本が乏しく學者の之を見ることが容易でないのを遺憾こし、此度平泉澄博士が主こなり、近衛公爵家に藏せられる原本により嚴密なる校正を加へて之を印刷し廣く學界に提供されるに至つたのである。本日記は其間多少の中斷は有るが、戰國時代の世狀、公家の生活、信仰等を窺ふべき貴重の史料であつて、此の公刊が學界を裨益することの多大なるは言ふ迄もないここで、吾人は博士始め校正等に當られた人々の勞苦を多こせなければならぬ（菊版上下二卷一五三〇頁、東京至文堂發行、價八圓）

### ◉王朝教育史資料　　春山　作樹編

本書は日本教育史を修める學生の演習用こして王朝教育史の資料こなるべきものを諸書より拔萃輯錄したものであつて、字體を古書の儘こし、又訓點をも除きたる白